

鳥・花木・草花の図案が多い。漱石の自装もあるが多くは青楓の装幀である。『草合』（縮刷）表紙、『漾虚集』（縮刷）の「琴の空音」中扉など鶴のような大きな鳥もあるが、小鳥を中心に集めてみた。（下の絵、いずれも部分）

A：青楓装幀、漱石『彼岸過迄四篇』（縮刷）「四篇」中扉（大正4年1月1日、春陽堂）
小鳥3羽と実の生った柘榴のようである。

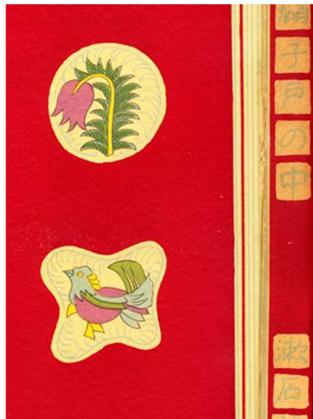
B：漱石自装、『硝子戸の中』（縮刷）表紙（大正4年3月28日、岩波書店）
下の囲みの中に小鳥がいる。

C：青楓装幀、漱石『道草』（縮刷）表紙裏表紙（大正4年10月10日、岩波書店）
2羽の小鳥がいる。花は牡丹だろうか。縮刷（大正3年9月20日）も同じ図である。

D：青楓装幀、漱石『行人』（縮刷）見返し（大正5年5月3日、大倉書店）
小鳥と草花（花はスミレだろうが葉（絵省略）はタンポポ様のギザギザ）である。

E：青楓装幀、漱石『明暗』（縮刷）表紙裏表紙（大正6年1月26日、岩波書店）
小鳥、桃の花と果実が描かれている不思議な絵である。これからしたら寅彦の絵も桃花かもしれないと思ってしまう。

F：青楓装幀、漱石『漾虚集』（縮刷）見返し（大正6年10月1日、大倉書店）小鳥2羽、
桃の葉と実のようである。



A 『彼岸過迄四篇』「四篇」中扉

B 『硝子戸の中』表紙

C 『道草』表紙裏表紙



D 『行人』見返し

E 『明暗』裏表紙

F 『漾虚集』見返し

もともと寅彦は装幀に強い興味を持っていたことが日記や書簡から窺える。

日記（明治 39 年 2 月 24 日）

朝又強震あり昨夜のよりも強し。学校に〔破損、二三字不明〕実験。帰途夏目先生を訪う。橋口五葉氏と中川君来居れり。文集の扉画草稿を見る。濃尾地震の話をする。

書簡（明治 39 年 2 月 26 日、野村伝四宛て〔絵はがき〕）

奇麗な御端書ありがとうございます。君の傑作まだ拝見致しませんが是非見たいと思って居ます。

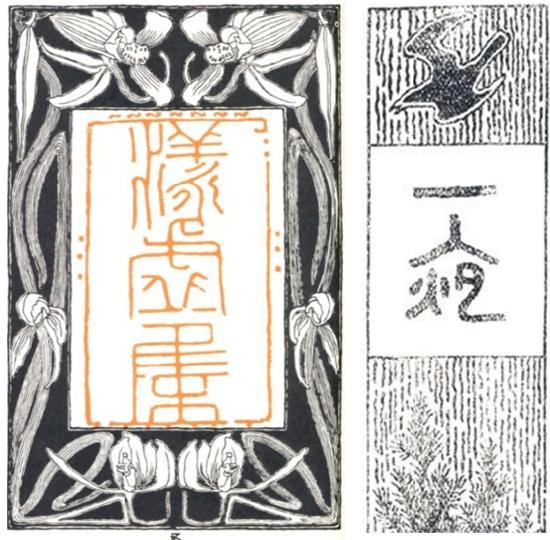
一昨日先生の処へ行ったら丁度橋口さんが文集の扉画の板下はんしたを持って来て拝見しました。実に奇麗です。うまい者です。僕の竜舌蘭でもあの位の挿画を入れれば屹度評判になりますよ。

ここに出て来る「文集」は橋口五葉が装幀した『漾虚集』のことである。漱石の「序」が明治 39 年 4 月、大倉書店と服部書店から明治 39 年 5 月 17 日に発行されている。橋口五葉と中村不折のカラー絵がふんだんに挿入されている豪華本である。書名は漱石の書齋の号「漾虚碧堂」からの命名。前掲の山水画「青嶂紅梅図」の落款にもなっている。

寅彦も画家の挿し絵入りの本を出したいという気持ちになったようだが、結局実現していない。

また、寺田家の家紋は「二つ雁がね」で寅彦と父・利正の墓の水鉢や三人の妻の墓に彫られている。（右下写真参照）「二つ雁がね」は片方の雁の嘴が開いているが、寅彦の絵と似ているような気がする。このように並べてみると、手紙の絵の上の世界は紛れも無く「漱石のサロン」であろう。そうすると下は「田丸卓郎の学問」ということになる。熊本・五高での感化がずっと持ち越しているのである。そして昭和 7 年 12 月に発表された「夏目漱石先生の追憶」と「田丸先生の追憶」で完成する。あるいは、高嶺俊夫が「寺田寅彦氏の断想」に書いている「昼間長岡〔半太郎〕先生に逢って硬苦しくなった気持ちを、晩に漱石に逢って癒すと云う方便、言わば凝った肩を揉みほごす様な手段を発見されたいらしい」の図でもあるようだ。

（注）日記、書簡で一部かな遣いを変更しています。また、いろいろご教示いただいた山田功さんに感謝致します。



橋口五葉デザインの『漾虚集』扉と「一夜」のタイトル（部分）



寺田夏子の墓の家紋